

## 巻頭言



### 学会運営へのひとつの提言

高橋 栄†



「学会の活性化」が叫ばれて久しい。直接的には会員数の慢性的ともいえる減少傾向や各種学会事業への参加者数の退潮とこれに伴う学会運営の特に財政面での苦況に問題が顕在化してきており、理事会としても平成7年度から「学会の将来ビジョン」委員会を組織して、会員に魅力ある当学会の今後のあり方を模索している。偶々筆者は平成5、6年度に別の学会の役員を務めたが、規模こそ違えそこでもまったく同質の問題が理事会の最大の関心事であった。おそらくこれは諸外国を含め多くの学会に共通の悩みと思われ、やや大袈裟になるが既成の「学会」とか「学会活動」という概念が地球規模で挑戦を受けていると言えなくもない。

翻って筆者の身の廻りをみても、たとえば見慣れない新しいキーワードに関連する動向調査を若い人に頼むと、彼らは学会発行の雑誌や論文誌には目もくれず、WWWを駆使して世界中から関連する最新情報を集めて1、2日のうちに報告してくる。ごく当たり前の行動パターンとしてそれが定着している。これは何も筆者の職場に限ったことではなく、情報関連産業を中心に多くの職場でも、さらには一部の家庭でも現実起っていることである。別の話しになるが、先日社内「情報処理ハンドブック」新版の購入を勧めたら「それにはJavaの解説は出ますか。」と若手に聞かれ、思わず返答に窮したのを覚えている。

それでは、冒頭に述べた傾向や上に例をあげたような現象は「もはや学会は無用の存在である」ことを示唆しているのであろうか。筆者自身は学会の存在価値に確信をもっており、その将来には楽観的さえある。

情報にもフローとストックの2種類がある。前者が一刻も早く入手することにこそ価値があって比較的寿命が短く、また一般には皮相的内容であるのに対し、後者は内容自体の本質性が問われ、より広い時空間において価値を持つ、といった傾向があるように思う。書物の例で言えば、新聞・

雑誌の内容の多くは前者にあたり、学術書や辞書の内容は後者であろう。

当学会の活動が直接対象とする情報処理技術に関する情報（ついでながらこの回帰的な表現が示唆するように当学会の活動は本来、直接の対象を超えて幅広い範囲でインパクトをもつものであり、このことも拙文の趣意と無縁ではない）にもこれは当てはまる。文字通り生き馬の目を抜くごとき市場競争の中から日々飛び込んでくる新商品や新技術の情報と、系統立てて整理され適用範囲や効果が見極められた科学技術に関する情報とを同列に論ずることはできない。両者はそれぞれ異なる価値を持つはずである。

学会の活動はストックとしての情報の提供に重きを置きここでこそ存在価値を發揮すべき、と筆者は考える。世上喧しい流行に乗り遅れまいとしていたずらに（実は価値や寿命も定かでない）「最先端技術」を追いかけたりその提供者たらんとするのではなく、その種の情報受発信をやりながらも、常に活動の主体は情報科学・情報技術にとってより本質的なもの、人間の英知として少しでも長続きするものの追求におきたい。そのためにも会員間の相互啓発や教育の場、さらには蓄積・整理された知識ベースを提供するのが当学会の主たる役割であると思うのである。

「最先端の研究内容の発表や把握こそ学会の使命」とのお叱りを戴きそうであるし、そのことを全面否定するつもりもないが、即時的な通信インフラに支えられた大競争時代にあっては、フローとしての情報を媒介する手段としては年2回の全国大会や月刊の学会誌・論文誌はいかにも時間軸が合わないのである。むしろ、価値を見極めた新情報の咀嚼・吸収によって自己変革しながらも常に体系的に整理された「使える技術情報」の頼りがいある巨大な知識庫を会員間の共有財産として育成する、というところに学会運営の活路が拓けると信ずる次第である。

(平成8年4月2日)

† 本会総務担当理事 (株)日立製作所